

止がる顔色なり。其内語り終りければ、扱も哀成事を承り候とて猶更感心あり。折柄夏の事ゆゑ暑氣つよく、先づ休息とて平家は二句にて終り、檢校は退出しぬ。其時家中の者共へは、用事候間何かへり申まじくとの事なり。何も今日珍敷事を承り忝きなど、それ〴〵禮に及、次には今日ことの外御落涙の御様子、もしは御氣然も御不例候やと伺申。其内いづれも前へ呼出し、皆々今日平家を承候處、少も感ずる顔色もなく、剩へ我等落涙に及び候へば、それを不審に存するよし。是は何と申事に候や。今日の平家ほど哀成事はなし。それに心附も無之ば、佐野の家は末になりけふを限と存極め候。其故は、先梶原が宇治川を可渡とて、生暖を所望するを、頼朝給はらずして佐々木に賜て牽て上る。浮嶋が原にて梶原是を見て、扱は我に佐々木を思ひかへ給ふと怒りて、佐々木と指違へ死し、よき武士二人討死して、鎌倉殿に損をとらせ申さんと云事、梶原忠をしらぬやうなれども、武士のうへにては、かく思ふまじき物にてもなし。何とぞと思ひ色々申せし馬を、我には不給賜して外へ給たるを、腹たつべき物か立まじきものか、料簡いた

して見候へ。かほどに思ふ事、武士の上には尤と思ふ也。しかるを佐々木と見ると言葉をかけたるを、流石の佐々木にてはや合點して、爰は陳する所と思ひ、御厩の小平に心を合せて盗出したりと答たる故、梶原も信實と聞て怒を止、我等もとく心附たらば可盜ものをとて、笑になりてのきたり。此時常のものならば有様に答へ、無益の事に死すべきを、當意即妙の返答感ずるに堪たり。惣て四郎が躰、忠と勇と智と兼備たる者也。先づ宇治川の先陣を心がけて、生暖を所望せしは忠也。所望叶ひて若し四郎生たりと御聞あらば、此馬にて宇治川の先陣せしと思しめせ、死したりと聞えなば、人に先んぜられしと思召候へと、鎌倉にていひしは勇也。又梶原が言葉かけたる躰、今指ちがへんと思ふほどならば、嘸はげしくあらんを、右の答は智也。遂に志のごとく先陣せしは、哀成事にてはなく候や。又義經の年二十五歳とあり。畠山重忠二十一歳にて歩にて渡す。是も此川の事は、鎌倉にて聞及たりとて先陣せし。歳もまらざれ共地理をならせし躰、源氏の武士共の心がけ、殊勝にあはれ成事にてはなきか。それをいづれもは、哀と存する心

のなきは何といふ事ぞや。又哀成をと望しに、那須與市を語る。平家の方より、紅の日出したる扇子を出して射よと云。義經誰ぞ射べきものやあると尋らるゝに、與市こそ、かけ鳥などを三に二つ必射る、此ものに被仰付よと云。與市を召寄、是を射よといはるゝ時、與市辭して是は大切なる事にて候。若射損じ候ては、源氏の名をれに候間、堪能のものに被仰付候へと申。其時判官大に怒り、此度鎌倉殿の御代官として我等罷向ふ。此所において我下知を聞かざる人は、とう〴〵歸られよと云はれたり。其時與市が心を思うて見候へ。射ねば判官の下知に背也。下知に背きて歸りてよきものに候や。射んとすれば私の事に非ず。射損じたる時は源氏の恥といひ、先祖の名迄汚す也。進退爰に谷たる所なり。此時の與市が心は何とあらんと、皆々思はれ候や。今聞ても汗の出る事也。扱此うへには可辭やうなき事故、源平兩陣相對し見物するうちへ乗出し、春風に扇は船頭にゆられ、定る方もなきに、矢とつて引たもち、南無八幡大菩薩と心中に唱へて、眼をひらき射たる所の心持、中々今更云盡しがたし。かやうの事を哀とも感ぜずして、何

をかあはれといふべきや。六代を引出し首を切たりとて、敵の子孫なれば、哀といふものにはなし。其心を檢校はしりて語るを、皆々其所に心づきのなきは、盲人よりおとりたる也。ひとへに我家の末に成たると思ふ也とて、そこに又落涙し、もはや世の中何のたのみもなし。彌是よりは遁世などするより外はなし。此事可申聞ため、用事あるとは申せし也。末席迄不洩やうに申聞べしとて與へ入れし。其後幾程なく、果して佐野の家も滅亡せしとぞ。

一、佐野宗綱、太閤に敬服す

宗綱曰。かつて武田信玄に逢しに、容貌卒爾なく思案ありさうなり。威あつて猛からずとも可申候。此人こそ日本をも知べき人なりと見たり。上杉謙信にも逢しが、打見るよりすさまじく、此人を打立なば日本の事は不足言、異國迄も中々鋒を衝ものはあらじと見えて、すさまじき容貌也。其後都にて太閤逢可申と被中越候に付いて、此人は天下を知らるゝ人なれば、嘸見事なる人にてあらんと思ひ行しに、前へ出候へば、それ〴〵と被申候て、近々と傍へ呼被申、咄から何から、只三十年も名染たる人の様にて、